早鐘眼鏡橋

1674 年に建造されたこの石造りの水路は、日本初の水路であり、現存する日本最古の水路である。大牟田地域は 1600 年代初頭に多くの災害に見舞われた。1637 年には深刻な干ばつと害虫の発生により作物が全滅した。その結果、村々では不安と混乱が起こり、治政を担う立花家を悩ませた。

干ばつに対する解決策が緊急に必要となり、立花家は早鐘谷に堰を建設することを決定した。堰は 1664 年に完成し、高さは 10 メートル、幅は 80 メートルであった。次に問題となったのは、水をどのように配水するかということであった。水田まで水を引くには灌漑用水路は大牟田川の上を通さなければならなかったが、木造では水の重みに耐えられない可能性があった。立花家の 2 つ目の解決策は、1634 年に長崎で初めて使用された中国の石造アーチ橋の建築技術を採用することであった。

長さ 11.2 メートル、幅 3.15 メートルの橋は、近くで採掘された凝灰岩を使用して建設され、完成までに 10 年を要した。この新たな安定した水源により、翌年には村々で米の収穫量が飛躍的に増加した。この単一アーチの橋は、長崎の橋にちなんで「眼鏡橋」と名付けられた。

長崎の橋は 2 つのアーチが川面に映り込み、眼鏡のように見えることからである。早鐘眼鏡橋は人や馬も利用していた。。

1898 年には、貯水池の下にある坑道の天井に穴が開き漏水した。貯水池の修復は困難であったことから、堰と灌漑用水路は放置された。橋の一部は 20 世紀に再建された。早鐘眼鏡橋は、国の重要文化財に指定されている。